

【研究論文】

日本語とモンゴル語の格関係の対照

エルデネビレグ ウヤンガ

1. はじめに

日本語とモンゴル語では述語が名詞を支配する関係(格関係)を表わす要素が存在する。日本語では格の関係は格助詞によって示されているが、モンゴル語では格語尾によって示されている。日本語の格助詞をそれぞれの用法に従ってモンゴル語と比較した結果、全く相違点なくモンゴル語の格語尾と一致するものもあれば、格助詞「を」、「に」、「で」のようにかなり異なるものもあった。ここでは、モンゴル人日本語学習者を対象とし、日本語を基にどの格がモンゴル語のどの格語尾で示されているかを明確にしていくが、筆者独自の格助詞の用法分類に従って比較する。なお、用法に付記した例文は益岡・田窪(1987, 1989)や山田(2004)のものである。

「を」

1. 動作・作用の対象.....本を読む。釘を打つ。
2. 移動の経路・動作の場所.....坂道を下る。空を飛ぶ。
3. 起点.....車を降りる。部屋を出る。
4. 期間.....楽しい時間を過ごした。
5. 発覚動作の方向.....下を向く。彼の方を見る。

「に」

1. 具体物・抽象物の存在場所.....庭に池がある。原因は資金不足にある。
2. 所有者.....私には子供が3人ある。われわれには金も暇もない。
3. 着点.....目的地に着く。学校に行く。
4. 変化の結果.....信号が赤に変わる。学者になる。
5. 受け取り手・受益者.....子供にお菓子をやる。恋人に指輪を買う。
6. 相手.....恋人に会う。田中さんに聞く。
7. 対象.....提案に賛成する。壁にもたれる。
8. 原因.....寒さに震える。酒に酔う。
9. 方向・目的.....大阪に向かう。買い物に行く。
10. 動作や事態の時、順序.....3時に会議がある。山田が最後に着いた。
11. 動作主.....先生に叱られる。
12. 割合の分母.....3日に1度。50人に1人。

「で」

1. 動作・出来事 行われる 具体的・抽象的な場所..... 図書館で勉強する。
2. 手段・道具..... 石鹸で洗う。パソコンで書類を作る。
3. 材料..... 紙で飛行機を作る。木で人形を作る。
4. 原因・理由..... 病気で学校を休む。大雨で電車が止まる。
5. 限度..... 30人で締め切る。6時で店を閉める。
6. 範囲..... 3時間で読み終わる。1時間で仕事を終える。
7. まとまり・動作主..... 大勢で夕食を食べる。
8. 内容..... 留学のことで先生に相談する。

上記の用法に基づいて比較をした結果、日本語とモンゴル語とでは共通点の多い格と、異なっている格とがはっきり分かれてきた。本稿では相違点の多い格助詞を取り上げていく。その際、益岡・田窪(1987, 1989)や山田(2004)の挙げた例を主に用いたが、両語の相違点をもっとはっきりさせるため、筆者の作例も含めることにする。

また、モンゴル語の特徴により日本語と異なっている部分があるため、「例外」や「注意」、「特徴点」などと記して述べているものもある。

2 日本語とモンゴル語の格表示使用上での相違点

2.1 日本語の格助詞「を」とモンゴル語の対格・格語尾「 ϕ /iig/g」

日本語の格助詞「を」は下記のように対象が明らかな場合は、モンゴル語ではたいてい格表示されない。これは「今朝ご飯食べた?」「もうレポート書いたの?」などと日本語の口語の場合と似ているため、学習者にとって日常生活の中では障害にならない。しかし、文章として書く時には誤用とされるため、モンゴル人学習者にはやや難しいのではないかと考えられる。これについて山口(1979)は「太郎が詩を書く。花子がこの曲を作った。彼等がトンネルを掘る。」などの例を挙げ、このパターンの〈を〉は概ね〈否定格〉である。(〈対格〉も使えるが〈否定格〉が普通である)」と示している。このように、格助詞脱落の誤りがモンゴル人学習者に多く見られる。

1. 動作・作用の対象

本を	読む。	釘を	打つ。
Nom ϕ	unshih.	Hadaas ϕ	hadah.

その他の対象の場合、例えば文中の名詞のどれも対象となり得る場合、対象を表わす「を」格はモンゴル語では対格の格語尾で表われる。

犬が	猫を	追いかけた	先生が	学生を	褒めた
Nohoi	muuriig	hooson	Bagsh	oyutniig	magtsan
	対格			対格	

山口(1979)によると、格助詞「を」がモンゴル語で格表示される際、次のような特徴を持っている。

皆が	彼女を	尊敬する。	皆が	彼女を	うらやましがる。
Bugd	tuuniig	hundelne.	Bugd	tuund	ataarhana.
	対格			与位格	

なかなか難しいと思われるのは、感情に関係する表現である。上に示したように、モンゴル語でも動詞によって格表示が決まる。そのため、両語の特徴をつかみ、学習していく方法が最も有効であると考えられる。例えば：

～を尊敬する	→	～iig hundleh(対格)
～を怖がる	→	～ees aih (奪格)
～を喜ぶ	→	～nd bayarlah (与位格)
～をうらやましがる	→	～nd ataarhah (与位格)
～を嫌う	→	～nd durguitsah(与位格)

2. 移動の経路・動作の場所

坂道 <u>を</u> 下る。	空 <u>を</u> 飛ぶ。	川 <u>を</u> 渡る。
Uruu zama <u>ar</u> uruudah.	Tengere <u>er</u> niseh.	Gol ϕ /oor gatlah.
造格	造格	造格

「走る、歩く、飛ぶ」などの動詞を使って経過する場所を表わす時には、日本語では「を」格を取るが、モンゴル語の場合は造格で表わされる。

道 <u>を</u> 走る	→	Zama <u>ar</u> davhih/guih(造格)
廊下 <u>を</u> 走る	→	Hongil <u>oor</u> guih/davhih(造格)
川岸 <u>を</u> 歩く	→	Goliin erge <u>er</u> alhah(造格)
飛行機が 空 <u>を</u> 飛ぶ	→	Ongots tengere <u>er</u> nisne(造格)

3. 起点

車 <u>を</u> 降りる。	部屋 <u>を</u> 出る。
Mashina <u>as</u> buuh.	Oroon <u>oos</u> garah.
奪格	奪格

「出る、引越す、発つ」などの、方向性の強い動詞を使って起点・出どころを表わす場合は、モンゴル語では奪格を用いて表現する。山口(1979)は日本語の「を」は奪格であり、日本語でも「から」と可変できると述べている。

4. 期間

楽しい 時間 <u>を</u> 過ごした。
Hogjiltei tsagi <u>ig</u> ongoruullee.
対格

5. 発覚動作の方向

視覚動作の方向は、モンゴル語では格語尾が表われないようである。

下 <u>を</u> 向く。	彼の 方 <u>を</u> 見る。
Doosh ϕ harah.	Tuunii zug ϕ /ruu harah.
	方向格

このように、日本語の格助詞「を」はモンゴル語では

1. 動作・作用の対象の用法の場合は、否定格と対格、感情を表わす動詞が使われる場合は対格以外に奪格、与位格をとる。
2. 移動の経路・動作の場所の用法の場合は造格、
3. 起点の用法の時は奪格、
4. 期間の用法の際は対格、

5. 発覚動作の方向の用法の際は否定格と方向格という形で表現されており、かなりの相違点があることが明確になった。つまり、モンゴル人学習者は格助詞「を」を使用する代わりに上で述べたそれぞれの格語尾に一般的に相当する格助詞を使用する可能性が高いのである。

2.2 日本語の格助詞「に」とモンゴル語の与位格・格語尾「d / t」

日本語の格助詞「に」のたいていの用法がモンゴル語の与位格で表わされる。そのため、その他のすべての用法にそのままモンゴル語の「d」, 「t」格語尾を置き換え、誤解を起こすことが多く見られる。

1. 具体物・抽象物の存在場所

庭に 池がある。 彼は 京都に 住んでいる。
 Hashaand tsoorombaina. Ter Kyotod amjdarch baigaa.
 与位格 与位格

格助詞「に」の存在場所の用法とモンゴル語の与位格は、下記の例で明らかであるように、一致する。

2. 所有者

私には 子供が3人 ある。
 Nadad 3 huuhed bii.
 与位格

格助詞「に」の所有者の用法は、モンゴル語の与位格で表現される。

3. 着点

目的地に 着く。 太郎が 部屋に 入った。
 Zorjson gazart hureh. Taro uruund orson.
 与位格 与位格

「特徴点」

モンゴル語の「行く」という意味の動詞「yavah」の場合、名詞の語彙的な意味によって与位格が省略されることが多い。それは名詞類が場所などを表わす語彙の意味を持っている、次のような場合によく見られる。

私は 明日 モンゴルに 行きます。
 Bi margaash Mongol ϕ yavna.
 田舎に 行く 市場に 行く 学校に 行く
 Hodoo ϕ yavna Zah ϕ yavna Surguulj ϕ yavna

ただし、モンゴル語の「yavah」という動詞は、「行く」以外に「通う」という語彙の意味も持っている。したがって、「学生になる」という意味で、1 回限りの動作ではなく通うという意味で使われる場合、「に」は与位格で表される。

来年から 学校に 行く/通う。
 Ireh jilees surguuljd yavna.

4. 変化の結果

モンゴル語では結果変化を表わす「に」格に相当する格語尾はない。つまり格表示されないのである。

信号が 赤に なる。
Gerlen dohio ulaanφ boloh.

5. 受け取り手・受益者

子供に 飴を やる。 恋人に 指輪を 買う。
Huuhded chiher ogno. Hairtai hundee bogj hudaldaj avna.
与位格 与位格

6. 相手

ここでの「に」格はモンゴル語では共同格で表わされる。日本語でも「と」格と可変であることを考えれば日本人モンゴル語学習者には分かりやすいが、モンゴル人にとっては難しいのである。

恋人に 会う。 彼は 父に 似ている。
Hairtai hunteigee uulzana. Ter aavtaigaa adilhan.
共同格 共同格

次に、山田(2004)の分類で「出どころ」の用法とされていた「に」格に相当するモンゴル語の格表示について述べる。下にあげた例では、相手が抽象的や具体的なもの、何かを与えている様子が伺える。つまり何か出していると理解してよい。このような表現はモンゴル語で奪格の格語尾「aas, ees, oos」で示される。

田中 さんに 聞く。
Tanaka guaigaas asuuna.
奪格

また、「聞く、質問する」はモンゴル語で「asuuh」と訳されている。「asuuh」は情報を獲るために誰かからその情報を引き出すという意味で方向性の強い動詞であるため、モンゴル語では奪格で表現されている。これと同類の動詞として「貰う、借りる、買う、教わる」などがある。

父親に 金を もらう。 先生に 本を 借りる
Aavaas mongo avna. Bagshaas nom zeeleh.
奪格 奪格

上記の例からみて、これらの文は格助詞「から」でも同様に表現できることがわかる。例えば、上記2つの例を「から」を用いて表わすと：「先生から本を借りる」「おばあさんから教わる」ということである。

7. 対象

提案に 賛成する。 壁に もたれる。
Sanalφ demjih. Hanaφ nalah.

上の例からみて、日本語の対象を表わす「に」格はモンゴル語では否定格であることが明らかである。ただし、対象が人称名詞となると対格で表わされる。

太郎に 賛成する。 母に もたれる。
Tarog demjih. Eejiig nalah.
対格 対格

8. 原因

原因を表わす「に」格はモンゴル語では与位格で表現されており、問題はない。

寒さに 震える。
Huitend chichreh.
与位格

酒に 酔う。
Arhind sogtoh.
与位格

9. 方向・目的

モンゴル語には方向を表わす格表示「ruu, luu」がある。日本語の方向を表わす「へ」格はモンゴル語の方向格と大体一致していた。方向・目的の意味を表わす「に」格で示される表現は、モンゴル語では動詞の語彙の意味により格表示が様々である。

大阪に 向かう。
Oosaka ruu chigleh. →Oosakag zorin yavah.
方向格 対格

まず、上に例として挙げた「向かう」という動詞は、モンゴル語ではいくつかの動詞で表わされる。それは「向かう」が語彙の意味によってモンゴル語ではそれぞれ別の単語で表わされるからである。

鏡/壁に 向かう tolj/hana ruu harah (方向格)
北に向かって走る hoid zugt chiglen davhih (与位格)
先生が学生に向かって言った bagsh suragchid handan helsen (与位格)
大阪に向かっている Oosakag zorin yavj baigaa (対格)
敵に向かう daisniig eserguutseh (対格)

次に、目的を表わす「泳ぎに、海水浴に」などの場合、モンゴル語では造格が用いられる。ただし、買いに行く場合だけは、モンゴル語では独特な表現をする。例にもあげているように、「パンを買いに行く」場合はモンゴル語では「パンに行く」と表現する。つまり、買うものを与位格で示すのである。「牛乳に・野菜に行く」という。

海に 海水浴に 行く。
Dalaid seleheer yavah.
造格

パンを 買いに 行く。
Talhφ avahaar yavah. パンに行く→Talhand yavah (与位格)
造格

そして、方向名詞で四方八方を指す語が「に」格を取っている場合、モンゴル語でどんな格で表示されるかを下に示す。

列車が 北に 走っている
Galt tereg hoid zugt/ruu davhih baina
与位格/方向格

方向名詞に「に」格が付く場合は、モンゴル語では与位格と方向格のどちらでも表わされる。

10. 動作や事態の時、順序

時間の用法の場合、日本語とモンゴル語では問題が生じないようである。

3時に 会議がある。 山田が 最後に 着いた。
3 tsagt huraltai. Yamada hamgiin suuld irsen.
与位格 与位格

11. 動作主

動作主が「に」格で表わされている場合は、次のように使役文や受動文となる。

先生に	叱られる。	彼は	皆に	尊敬されている
Bagshid	zagnuulah	Ter	bugded	hundlegddeg
	与位格		与位格	

動作主の「に」は受動文の場合、モンゴル語では与位格をとることが多い。一方、使役文では次のように表現される。

彼に	これを	やらせましょう。	赤ん坊に	ミルクを	飲ませる
Tuugeer	uuniig	hiilguulii	Nyalh	huuhded	suu uulgah
	造格			与位格	

12. 割合の分母

割合の分母を表わす「に」格はモンゴル語では与位格で表示され、格語尾「d, t」をとる。ここでは日本語とモンゴル語の間に違いは起こらず、問題はない。

3日に	1度。	50人に	1人。
3 odort	1 udaa.	50 hund	1 hun
	与位格		与位格

2.3 日本語の格助詞「で」とモンゴル語の造格・格語尾「aar/oor/eer」
格助詞「で」に相当するモンゴル語の造格は、モンゴル語の共同格や奪格の格語尾と同様に母音調和され「aar/oor/eer」で示される。場所を表わす「で」格はモンゴル語で与位格で示されることが多い。

1. 動作・出来事の行われる具体的・抽象的な場所

図書館で	勉強する	海で	泳ぐ
Nomiin sand	hicheel hiih	Dalaid	seleh
	与位格		与位格

しかし、例外も少なくない。例えば次の、

学校で	勉強する
Surguulj deer	hicheel hiih

この例を直訳すると「学校 上 勉強する」となる。「図書館で」は「勉強する」の与位格に当たるが、場所を表わす名詞が「学校」に変わると与位格ではなく「deer-上」といった日本語の「で/に」、「のところで/に」の意味で用いられる後置詞をとる。同じ動詞なのに、場所を表わす名詞が変わるだけで表現が異なるので、ニュアンスで判断した上で格表示せざるを得ない。これがモンゴル語学習者にとっては大きな困難であると思われる。下にこれと同様な例をいくつか挙げておく。

会社で	会議が	あった	工場	で	事故が	あった
Kompani deer	huraltai	baisan	Uildver	deer	osol	garsan

また、移動の起点を表わすと考えてよい下記の場合は、モンゴル語では奪格が用いられる。例からわかるように、ここでの「で」格は「から」格に変えることができる。

太郎は 三宮で 電車に 乗った。
Taro Sannomiyagaas tsahilgaan tergend suusan.

奪格

空港で タクシーを 拾う。
Ongotsnii buudlaas taksi barih.

奪格

2. 手段・道具

日本語の「で」格で表現される手段や道具は、モンゴル語では全て造格で表現され一致するから、問題はない。

石鹸で 洗う。 新幹線で 東京へ 行く。
Savangaar ugaah. Hurdan galt tergeer Tokyo ruu yavna.

造格

造格

3. 材料

日本語の材料を示す用法の格助詞「で」は、モンゴル語では造格で表現され「aar, eer, oor」といった格語尾が付く。

紙で 飛行機を 作る。 木で 人形を 作る。
Tsaasaar ongots hiih. Modoor huuheldei hiih.

造格

造格

4. 原因・理由

原因や理由を表わす日本語の「で」格は、モンゴル語では奪格で表示される場合が多い。

但し、ここでモンゴル語の訳文をさらに日本語に直訳すると「風邪のためから仕事に行かなかった」となる。つまり「Nの原因からV」という文型となる。

病気で 学校を 休む。
Ovchnii ulmaas surguulia amrah.

奪格

このことから分かるように、モンゴル語で奪格が使われている際、格語尾の前に必ず「～せいで、～かげで、～ため、～理由で」などといった語がくる。

大雨で 電車が 止まる。
Aadar boroonii ulmaas tsahilgaan tereg zogsoh.

奪格

原油高が 原因で 物価が 上がった
Neftiin une nemegdsen uchraas yumnii hansh ihsev

奪格

次の例では、「洪水」や「病気」が手段・道具のような扱いになっていると考えられる。勿論、原因・理由を表した表現もできるので、矢印の横に示すことにする。

洪水で 建物が 流れた
Uereer baishin urssan → Ueriin ulmaas baishin urssan

造格

奪格

犬が 病気で 亡くなった
Nohoi ovchnoor uhsen → Nohoi ovchnii ulmaas uhsen
造格 奪格

「あなたのおかげで私たちが勝った」という表現はモンゴル語では決まりの語句で「Tanii achaar bid yalsan」と造格で示される。

5. 限度

日本語で限界点を表わす時は「で」格を使い、モンゴル語では造格を使用する事が下の例から分かる。

30人で 締め切る。
30 hungeer taslah
造格

6. 範囲

日本語の範囲の「で」格は、モンゴル語では与位格で表現されるものもあれば、後置詞「dotor-中」を用いて表わすものもある。それ以外には相違点は見られない。

モンゴル・ゲルを 30分で 分解する
Mongol geriig 30 minutand buulgana
与位格

3時間で 読み終わる。
3 tsagiin dotor unshij duusna.

7. まとまり・動作主

格助詞「で」のまとまりの用法は、モンゴル語では造格で示される。

全員で カラオケに 行く
Bugdeereee karaoke yavna
造格

8. 内容

内容を示す「で」格の場合は、「について」という意味を表わすモンゴル語の後置詞「talaar, tuhai」が用いられ、表現される。

留学の ことで 先生に 相談する。
Gadaad suraltsah talaar bagshtaigaa zovloldono.

3. 日本語とモンゴル語の格対照の考察

ここで、本稿で比較した格助詞と格語尾との関係をまとめると、次のようになる。相違点の多い格助詞「を」については、動作・作用の対象の用法はモンゴル語では対格で表われたり、上で述べたように不定格であったりする。それらを見分ける方法として挙げられるのは、「こそあど」などの指示代名詞によって修飾されている語や、人称代名詞、固有名詞など、何か特定のものである場合は、直接目的語が対格をとると判断する方法である。修飾語によって、一般的なものではなく、個別のものであることが示されている場合も同様である。一方、「本」、「人」など、不特定の一般的なものである場合は、直接目的語が不定格をとる。そのため、モンゴル人学習者が格助詞「を」を抜いた表現をすることが多く見られている。上でも述べたように、日本語の格

助詞「を」は、モンゴル語では 1. 動作・作用の対象の用法の場合には否定格と対格、感情を表わす動詞が使われる場合には動詞の語彙的意味によって対格、奪格、与位格をとる。2. 移動の経路・動作の場所の用法の場合たいてい造格で表わされているが、「橋を渡る—guur ϕ garah」, 「川を渡る—gol ϕ gatlah」の場合は格表示されないこともある。3. 起点の用法の時は奪格、4. 期間の用法の際は対格にそれぞれ相当する。5. 発覚動作の方向の用法の際は否定格と方向格という形で表現されており、モンゴル人日本語学習者にとって極めて難しい助詞である。

表 1 日本語とモンゴル語との比較 格助詞「を」

用法	モンゴル語の格
1. 動作・作用の対象	ϕ ・対格・奪格・与位格
2. 移動の経路・動作の場所	ϕ ・造格
3. 起点	奪格
4. 期間	対格
5. 発覚動作の方向	ϕ ・方向格

格助詞「に」の12の用法のうち大半の8つの用法がモンゴル語の与位格に相当している。3. 着点の用法では、「行く、通う」という意味の動詞「yavah」の特徴により「行く」を意味する場合は、格表示されず、「通う」の意味で用いられる場合は、与位格で格表示されている。6. 相手の用法はモンゴル語では共同格と奪格に相当している。ここでは、「～に聞く、～にもらう」などといった何かを引き出す方向性の強い動詞が述語となっている場合、奪格で表現されることが言える。7. 対象の用法についてはモンゴル語で格表示されないことが多く、「～に興味を持つ」や「～に反対」といった特徴のあるものは対格で表わされている。最も多くの格語尾で表示されていた用法は9. 方向・目的である。

表 2 日本語とモンゴル語との比較 格助詞「に」

用法	モンゴル語の格
1. 具体物・抽象物の存在場所	与位格
2. 所有者	与位格
3. 着点	ϕ ・与位格
4. 変化の結果	ϕ
5. 受け取り手・受益者	与位格
6. 相手	共同格・奪格
7. 対象	ϕ ・対格
8. 原因	与位格
9. 方向・目的	与位格・方向格・造格・対格
10. 動作や事態の時、順序	与位格
11. 動作主	与位格
12. 割合の分母	与位格

格助詞「で」はモンゴル語の造格に相当することが多い。しかし、上で見てきた助詞のうち後置詞を最も多く用いて表現されていたのも「で」格であった。例えば 8. 内容の用法は完全にモンゴル語の後置詞「talaar/tuhai」で表現され、6. 範囲の用法も「中、間」という意味の後置詞「dotor」を用いて示されている。また、1. 動作・出来事が行われる具体的・抽象的な場所の用法ではモンゴル語の特徴によって場所を表わす後置詞「deer」を用いたりする。4. 原因・理由の用法は、奪格で表わされるが、「～NのせいからV」の形で「～Nnii ulmaas/uchraas」と表現されるのである。このように日本語の格助詞「に」と「で」は、同じ助詞だといっても、様々な用法で用いられていて、日本語母語話者には考えなくても自然に使えるが、外国人日本語学習者にはかなりの難問である。

表 3 日本語とモンゴル語との比較 格助詞「で」

用法	モンゴル語の格
1. 動作・出来事に行われる具体的・抽象的な場所	与位格・後置詞「deer」・奪格
2. 手段・道具	造格
3. 材料	造格
4. 原因・理由	奪格・造格・ulmaas/uchraas
5. 限度	造格
6. 範囲	与位格・後置詞「dotor」
7. まとまり・動作主	造格
8. 内容	後置詞「talaar/tuhai」

上の表では、日本語の格助詞「を」、「に」、「で」の一つひとつの用法が、モンゴル語のどの格で表示されるかを示した。

(えるでねびれぐ うやんが・教科教育専攻国語教育専修)